

## 抑留記

滋賀県 村木庄蔵

鞍山市初音街に会社独身寮黎明、勇飛の二寮あり。千人寮と言われ、黎明に入室、会計をする。グライダー班に所属し練習開始すると会社事務繁多の折からプライマリーで終了する。

昭和十九（一九四四）年七月二十九日正午、突如空襲警報あり、アメリカの爆撃機B29重慶より襲来、工場を爆撃される。骸炭炉が一番激しく、溶鉱炉少々、高炉ガスタンクは難を逃れる。比重の重いガスタンクが被害を被っていたら付近一帯大変な事になっていたと思う。

投下された五百キロ爆弾の不発弾が本社の警備隊本部に置かれている。

親愛なる東條に贈ると書かれていた。

八月末に父危篤の電報を受け取り駅に切符の手配すると会社の証明が必要との事。人事課に交渉

すると駄目。最近、偽電報で内地に帰国する者が多いとかで信用してもらえず、結局朝鮮の木浦から博多港行きルートで小型貨客船に乗船して帰る事にする。港の出口は潜水艦に撃沈された船のラストだけが見えていた。九月二日に帰り、父に会う事が出来、三日に亡くなり葬儀にも参列する事が出来た。

満州へ帰るときの切符は即座に買う事が出来た。下関では移動中の兵士でいっぱいでも宿も取れず、待合所で夜を明かす次第、戦局の厳しさを感じさせられた。

昭和二十年八月十三日午後一時五十分、突然経理課長の前に呼出される。何かと思えど、思い当たる事なし。課長は我々三人におめでとうと言云われて赤紙の召集令状を渡された。

そのときの緊張感激は言葉に言い表す事も出来ず、血気盛んな、時代の教育を受けた十八歳の人間としては無理からぬ事と思う、入隊まで十時間。

午後三時経理部長の壮行の辞があり、乾杯の後、

送別会を終えて黎明寮に帰る。香島寮長は先に帰って我々のために万全を期してくれた。

私は阿知波君と二人、寮の会計をしており寮人五百人の食費会計をしていたが残った者に事務の引継をする。寮の大半が応召されて残務者は少なくなつた。寮長以下全員講堂に集まり、残留者は「俺も後から行く」「頼むぞ」の声に送られて寮を十時半ごろ出発、中央会館に集合十二時。

松浦の叔母さん、饒別とパンを下さり送つて下さつた。会館の中は真夏の事とて蒸風呂の様で、中はいっぱいの人である。緊張した顔、また酒に酔つた者、種々雑多である。その中、引率者が壇上に現われ、編成表名簿を読み上げた。

三七五〇二、三七五〇五等部隊名が呼ばれ、私も呼ばれ、最後の方に親友阿知波君の名を聞く。彼は確か大連に居たはず、編成が終り皆鞍山駅に集合。十四日午前五時出発。思えばあの時の気持ちは御国のために尽す気持でいっぱいであつた。

汽車の中は三十歳、四十歳前後の人が多く、我々

は十八歳で召集されたのである。いまだかつて無い事である。遼陽で更に人に乗せ、停止したりバツクしたりして午後六時半やっと奉天（瀋陽）駅到着。鞍山、奉天間十二時間もかかった。駅構内はゴタゴタしていて停車中の貨車には避難民がいっぱいいて南下する途中である。赤ん坊は泣き、しかも無蓋車であつた。我々はこれを見て、畜生今に見ろ、仇はきつととつてやると言う気が憤然として湧いた。奉天到着までは雨が降り続いていたが到着後、雨は止んでいた。

奉天市街を行進して奉天神社に集合、我々三七五〇三部隊は上等兵が引率して田舎の方に向かつて出発した。道に迷いながらあちらこちらと探して東光中学校に到着したのは夜の十一時ころであつた。腹も減つていたがすぐ横になつた。しばらく眠つたかと思う間もなく起され、皆が非常呼集だと騒いでいたがどうも様子がおかしいと思ひながら用意をして庭に集合していると、炊事場に握飯の用意がしてあり、それでようやく腹を満たす。

翌日、中隊、小隊、分隊編成があり、私は第三小隊第四分隊である。班長代理は加藤上等兵である。編成後直ちに陣地構築に北陵に向って出発。

そこで小隊長に、お前らは戦車と心中するのだと言われ、皆もその気持ちでいたが夕方炊事用の薪を取りに松の伐採を終え、帰るとすぐ移動命令が出ていた。北陵の方面に落下傘部隊が降下したとデマも出てきた。

移動の用意をすると悲しいかな、武器は南方戦線に回されてろくな銃も無く、惨たるものであった。我々は弾薬を背負って歩く。私は手榴弾の木箱を縄で背負って線路を歩くも背骨に当って痛かったが、奉天に向って行く途中、馬車に積み替えてもらって助かった。

東光中学に到着すると私達は思いもよらぬ話で耳を疑った。嘘だと強く否定してみたが詮なし、日本が無条件降伏したとの情報を聞く。

信じられなかった、皆泣いた。残念でその気持ちで胸がいっぱいになった。奉天市内で赤ん坊を

背負った女の人が泣いているのを見るにつけ、涙が出てきて仕方なかった。

皆呆然としていると突然小隊長が禪一丁で現われ、軍刀を持って壇上で仁王立ち、皆の生命を俺に預けてくれと叫んだが誰も聞いている者は無く、半ば自暴自棄になって気が荒んでいく者が多くなった。その夜皆の前に酒と甘味品が持ち出され飲み明かした。酔い潰れて窓から吐き出した。その下を週番士官が通り叱られたが兵長に後から殴られて事無きを得た事を覚えていた。

八月二十日、また移動命令が出た。

道義屯と言う部落に集結せよと言う事である。武装解除が有り、その際銃二丁を毛布の間にかくし、皆手榴弾を二個ずつ持ち、背囊には詰められるだけ詰め、手に持てるだけ持ち、煙草も忘れなかった。関東軍には銃器はほとんど無かったが、被服も布類が沢山あり、それらを校庭に山積みされた。校庭の外側はそれを狙った満人でいっぱいであった。終戦と同時に帽子は青天白日の徽章が

付けられ、かぶっていた。輜重車を引っ張り、東光中学を後にして道義屯に向った。

前夜鞍山より召集された者の中で逃亡計画の話があり、私たちも誘われ返事するも実行する事はできなかった。途中ソ連戦闘機の示威のデモンストレーションを見ながら北陵飛行場に通じる大道路に差し掛かったとき、ソ連兵が二人馬車で通りかかり、部隊を停止させ指揮官の腕時計を強奪して行った。途中幾度もそんな目に遭いながら行軍した。時計を隠しても夏のことと跡がくつきり残っていて隠しようがなかった。ソ連兵の中には二の腕まで十数個つけている者もいた。

途中放置された大豆、野積みされていたが雨がよく降ったので袋の間から目が出てモヤシになっていた。缶に入った乾パンも野積みされており、中のコンペイ糖だけ取り出しポケットに入れた。大雨が降って輜重車が泥濘にはまってしまい泥水に腰までつかりながら運び出して、色んな目に遭いながら道義屯に到着した。

宿舎は仁王さんのある寺で暮舎生活であった。逃亡する者も現われ、我が分隊その気になり準備すれど、班長、酒に酔ってその期を逃してしまった。部落へ食糧探しに行ったり、川へ魚獲りに手榴弾を使用するも不発に終り中止、恐い事の上なし。部落の人も敵意を持つ人も無いよう助かったように思った。

九月一日再び道義屯を後にして奉天に向かって行軍した。中隊長が今度こそ解散だと言われて皆を喜ばしたが、到着した先は東北大学で、ようやくの事の中に入ると何の事はない捕虜収容所で、私達は完全に捕らわれの身となったのである。東北大学は抗日運動の教育の盛んな所と聞かされた。中で中隊編成があり、中隊長は居田少尉、班長は古川伍長で編成された。女性も軍服を着て頭を坊主にされていたが青く光っていて、すぐ女性だとわかった。後発の道義屯を出発した部隊は八路軍と部落民に襲撃され、ばらばらになって東北大学に入って

来た。何か部落民の反感を買ったらしいと聞く。

九月二十三日ごろと記憶する。中隊全員集合、中隊長は我々は新京（長春）以北に行く事になったと話された。その原因たるヤソ連と支那側との折衝の結果らしいと言われたが、これまたソ連に騙されたのである。

幸虎屯にて乗車、既にソ連の警備兵が我々を待っていた。警備兵は若くて私達と同年齢ぐらいが多かった。貨車は扉を閉められ、車内は蒸し暑かった。奉天に戻り、その後出発した。

終戦後、物資は市内各地に氾濫して物価は上っていた。タバコを買うと、中には空を渡す悪質な者もいた。貨車は進んだり止まったりを繰り返して、鉄嶺公主嶺を過ぎ、新京を過ぎて北上したが、新京以北はどこかさっぱり分からなかった。

媛化で一週間ばかり停車、饅頭はここが一番安かった。警備兵の中には我々と満人とを問わず乱暴する者もいたが、中にはおとなしい警備兵もいた。警備兵の指揮官は曹長だそうである。貨車の

上には警備兵がいて、各車両で脱走を企てるも未遂に終り、貨車の外から針金をかけられ自由に外に出られず皆困った。

途中炊事をしながら黒河に到着する。向かい側はソ連領である。ついにシベリア行きが決まった。貨車の中で小隊長が我々の行き先が北安らしいと言った事がおかしかった。

黒河で一週間余り労役に服したが言語に絶することがあって、誰言うことなく作業を投げ打って一斉に宿营地まで逃げ帰った事がある。その日炊事当番も今日は肉があると行って食べたが、後で聞くとソ連兵が撃ち殺した犬の肉だったそうである。犬の肉は初めて食した。

黒龍江を渡る船に食糧を積み込み中ノモハン事件で負傷した人が現われ、松葉杖で打たれた者もいた。遂に黒龍江上の人となり、向いのブラゴエシチェンスクに上陸した、九月下旬は寒かった。

駅まで二里余り食糧運搬をしたが、百キロ入りの食糧を三人一組で運ぶのだが、ドンゴロスで持

ちにくく、二回目は途中で角を破って道にこぼしながら運んだ。終りにはソ連側も怒りながらトラックで運んで行った。雪も降り出して手は冷たくなっていき、駅で一晩明かすつもりでいたが泥棒が多くて眠る事が出来なかった。

途中チタを過ぎ大きな駅をいくつか過ぎて貨車は驀進した。止まった駅では婦人連中がミイラミイラと言ってバケツにジャガイモをいっぱい入れて差し出し、石けん一つと交換した。この交換も先に行くほど量が少なくなってきた。停車駅では先に通って行った部隊の炊事の跡が見受けられた。

十月九日遂にある引込線に入り、雨が降っていたが十四大隊千人が降りた。十六大隊の先発はまだ降りず十四大隊だけ出発する。スルジャンカと言う地名である。鉦山と言われ、田舎で山も有り、鉦山か伐採かいずれかと思った。

川を渡りラーゲルに到着、外に長い事待たされ、やっと中に入ると早速所持品及び装具検査があり、時計、万年筆が主に取り上げられ紙幣も取られた。

中は三段に仕切られ、粗末な板で作られていた。これから先の事を考えると不安になり落ち着けなかった。夜の食事は食糧がなく、皆から集めた乾パン三枚が配給された。トイレは板で腰掛式の感じだが、二十五センチぐらいの丸い穴が開いてるだけでいかにして用を済ますか困った問題である。夜トイレに行つて帰ってくると狭いので寝る所がなく、島根の癸坂君と二人で床下に入り、生のジャガイモをかじつて眠った。

しばらくは毎日所持品私物検査でする事なし、鉛筆、紙等文房具品は片端から取られた。衛生材料等は取られる前に衛生兵に渡した。

始めの間、おっかなびっくりで異国人に接したが慣れてくると民間人も珍しいのか煙草をくれる人もいた。十一月に入ってそろそろ種々な使役が出て来た。

まず雲母鉦山の採掘である。ラーゲルの中は雲母の山でいっぱい、雨が降ると濡れた雲母が夜に警備灯の光を受けてキラキラ光ってきれいであ

る。裏に大きな川が流れていて、そこに運搬する使役で分隊から二、三人ぐらい毎日出て行ったが、私は耳が悪くて作業を休ませてもらった。雲母の中には時々地下足袋や色んな物が隠されてあった。皆取り上げられるのを嫌がった作業である。

タバコもだんだんなくなり心細くなったが、子供達がよく物々交換に来てタバコと交換した。員数外の品物は持っただけでもどうせ取られるので馬鹿らしくなり、タバコに化けていった。

警備兵にはよく怒られたが背に腹変えられずである。

食事は皆雑穀類でまずく、朝は黒パンだが最初の間は酸っぱい感じで食べられなかったが腹が減ってくるに慣れて食べられるようになった。スープはキャベツの葉が二、三枚浮いていて目玉汁と言われていた。食事当番も大変で上段から皆の目があり苦勞する。分隊によってはハカリを作り、パンを賽の目に切って計っている所もあった。

異境の地に捕われの身に何の娯樂もなく、ただ

寝ると食物とタバコの三つが楽しみになってしまった。皆の気持ちもすさんで来て、だんだんだらしなくなると思うと悲しくなってきた。ある日、他の分隊の班長、突然ゲートル巻いて背囊背負って望楼の方に「お母さんただいま帰って参りました」と挙手の礼をされるのを見て、誰一人笑う者もなく身につまされていた。

十一月に入っただけでいよいよ作業に従事しなくてはならなかった。一部の者は既に雲母鉾山に入っただけで作業に従事していた。医務室より退室した私もしばらくすると交替要員で作業に出るようになった。

鉾山はラーゲルより三十分ぐらいの山の中腹にあり第一作業場である。第二作業場は奥山の頂上で四十五分ぐらい歩き、その後板の階段を登らなくてはならなかった。皆野菜不足で脚気を病み、徒歩は困難を極めた。しかしソ連軍医は腫れるか凹む脚気以外は認めず、神経痛はもちろん、外部に出ない病気はほとんど休養許可なし、神経痛の者は足を引きずりながら作業場に向った。時々生

の丸太を三人で担いで頂上まで持って上るのだが階段は垂直で凍っていて、滑りやすくなっている中、一組でもバランスを崩せば下に続く者全滅である。登ったときは汗びっしょりだが寒いのですぐ冷えてくる。

昼食は馬車が運んで来た高粱飯を当番が飯盒に移して三本ずつ両手に六本持つて階段を登るのに一苦勞。登ったときは飯の上部が薄く凍っているので焚火で温めて食事をとる。虱と南京虫によくやられ、特に虱退治にはきりがなく、皆閉口していた。また湿疹が指の間に出来、スカベースと言われ二度ばかり入室した。

十二月、夜勤で大型鉄製トロッコ押し作業で風邪をひき、三九・五度の熱で入室。一週間後退室、また鉱山に戻り、今度は豎坑に入るが、地下百メートルあったような気がする。真っ直ぐな梯子をカンテラ一つ頼りに三人で監督にマダムが一人ついていた。中は寒かったが風がないので外より暖かい感じで、しかし底冷えがした。作業は手

動巻揚機で、寒いにも関わらず襦袢一枚で頑張った。一人は採掘現場に降り二人は上で巻揚げをするのである。マダムはノルマ七十回と宣言して一回巻き上げる度に石を一個ずつ物入れに入れて勘定していた。マダムはタートル系で日本に汽車や電車が走っているか聞かれて啞然とした。夜勤で豎坑に入ると時間がわからずノルマ完了が遅れて、外に出ると二時に終了予定が大幅に遅れ、外作業が終わった者が皆揃うまで帰れず待っていてくれた。頂上から見ると星は満天の星で手を出せば届きそうなくらい近くに見えて気分が安らいだ。

時計が無いので北極星を中心に回る北斗七星の場所を時間を計った。

ラーゲルの点呼で将校二人で千人を数えるのに一回で終わった事がなく、いつも二、三回かかった。最後には全員外に出してラーゲルの一カ所から一人ずつ数えて中に入れた事もあった。その無能ぶり、あきれて口も塞がらなかった。結局私たちが十列に並び点呼を受け、ようやく寒さから逃れて



やれやれであった。

一度だけスルジヤンカのバーニヤに行った事がある。入口で裸になり衣服は全部針金の輪に通し滅菌室の方へ。私たちは中へ入ると何もなく、大きなたらいに少しのお湯で洗って出ると衣服が出てくるが中には焦げた物もあった。

町中で会った民間人は人なつっこく、ヤポンスキーハラシヨ、ゲルマンスキプツニイハラシヨと言って話しかけて来る。

十二月三十一日、夜勤で内地の事を忍びながら山の中腹で長野県の山田君と二人でトロッコを押して年越しをした。

帰って寝ていると週番上等兵さん、外は越こで中に餅米を入れた食物を持って来てくれた。初めての餅米の味は何とも言えなかった。昼には米の飯が出るこの話で皆期待していたがご飯はかけごに半分で、皆期待はずれであった。

分隊員全員が集まり正月を味わった後、解散した。三日からまた作業開始、一月中旬に作業替え

があり、私は第三作業に回された。場所は近い川の向うに在る。二月に入りその鉱山は余り出ないので取り止め、また種々の作業場に割当てられた。

森林伐採でトラックで約三十分山に入り、後は歩いて山に入る。今までの作業と違って大木が雪煙をあげて倒れ、切られた木をテコを使って流れを修正しながら谷底に落す作業で木は魚雷のように飛んで行った。

三月に入り山はまだ寒く、雪は深かった。水筒に水を入れたままかけておくと夜中にポンポンと音がして中の水が凍って膨張して、栓のゆるいものは栓を飛ばし、堅いものは水筒が膨張して破裂するか、破裂直前で四合入りが一升近くまで膨張した。三月二十八日三七・二度の発熱で練兵休二日もらう。三十一日に等級検査があつて私は三級になった。等級検査はお尻の肉をつまんで決めていたように思った。一級二級三級と各級に別れて重軽作業に行く事になり、三級は二階で休養する事ができた。四月から五月二十日まで休養、二十

日の検査で二級になり、山の木工要員で作業に出た。三級の間は雑役程度である。

一日の食事、朝食は黒パン六〇グラム、昼はスープ、夜に飯盒の蓋一杯の雑穀が与えられた。

山の木工伐採は現品を持参して飯盒炊事で野菜はなく雑草を食した。ある兵隊は毒茸で中毒をして衛生兵に塩水で洗浄してもらい命拾いした者もいた。私の飯盒の蓋は焚火の火が強くて蓋の一部が溶けていた。

六月一日医務室に行き診断を受ける。腫物が出て来て二日に入室、六月から七月二十六日まで入室。退室した夜、寝汗かき濡袴が濡れて冷たかった。

また無理に作業に出て悪くなり、二十八日の診断の結果湿性胸膜炎で二十九日の入室。食事は喉を通らず食欲全然なし、三八度の熱が一週間続いて口には何も入らなかった。班長が心配して見舞いに来てくれたり、作業でバイカル湖に出た時は魚を持って来てくれた。

前の入院患者はイルクーツクの病院に転送され

ていた。

胸が痛み毎晩寝汗をかき眠れぬ日が続いた。気候も六、七、八月と日中暑くて夜も蒸し暑くて、明け方になるとよく冷えるのは満州と変わり無いように思われた。

外科専門の軍医殿、水を抜いてもらうのに直立不動の姿勢にて左腕をあげ肋骨を数えて太い注射針を刺して水を抜いてもらうのですが、一回目二〇〇ccで脳貧血を起して中止。二回目四〇cc、三回目は二四〇ccを抜いてもらった。後はよくカンフル注射をしてもらった。

九月二日は父の命日である。そのころは食欲も出て来ていた。病気続きで心配したが亡き父が守っていてくれるような気がして頑張らねばと思ひ異国の地の事とて境遇に負けず養生に努めるようにした。また良い事は覚え悪い事は忘れるようにし、無事帰れる事が出来たら母親に孝養を尽す事を頭に置いて行こうと思うようにした。

三日の夜、ソ連軍医通称ブルさんと呼ばれてい

る彼女は私にもイルクーツクの病院行きを伝えた。私は部隊から離れるのに一抹の不安を感じたが身体のためには致し方なく、皆も別れを惜しんでくれた。特に就職以来一緒に生活し、部隊も一緒にいた戦友阿知波君と別れるとき、私は彼の手を握って泣いて別れた事は今も脳裏に深く刻まれている。入院するとき、汽車に乗車するとき、精神異常の班長も一緒でしたが、その後は別れて消息は分かっています。

イルクーツクの病院に入院して最初の朝の食事は白い大きな皿に小さなジャガイモが七個入っていた。病院は大きく病室も明るくきれいであった。十七号室に入室して日本の衛生兵の世話になったが、世話になったのはほんの僅かで彼らは看護婦に一生懸命で結局私達は自分自身の事は自分で考えねばならなかったが看護婦達は為す事もなく、病人を見ると言うのは薬を与えるか注射をするのが精いっぱい感じで、注射も一部の看護婦に限られていた。彼女らはソ連の中でもインテリに属

していて洗濯もせず衛生兵任せであった。

入室していたときよくドイツ人軍医がベッドのそばに来て、ベッドの鉄を削って飲むと良いと笑いながら教えてくれた。後で分かった事だが栄養失調で鉄分不足を教えてくれたのだと分かった。また時々トランプを持って来てツーテンジャック等遊び方を教えてくれた。

入院中は余り熱も出す順調に快復していた。

病院の中庭に幕舎があり、キャベツが蓄えられていた。私達若い者が夜中に帰る途中階段で病院長に肩を捕まえられるも、幸い階段が薄暗かったので振り払って病室に逃げ帰った。すぐさま警備兵が臨検に回って来たが皆静かにして難を逃れた。その後皆で兎の様にキャベツにかぶりついた。

十一月二十一日診察があり、院長に呼出されて退院を命ぜられた。二十二日の午後階下に降り装具をもらい、廊下で一晩明かし二十三日第五ラゲルへ。山を越えた鉄骨の工場地帯のすぐ近くであった。病院の食事が少なかったのでラーゲルの

食事は一度に食べきれなかった。次の日診断があり、十日間の練兵休をもらう。その間はラーゲル内の掃除である。十日の後再診があり、私は二級で作業に出た。毛皮のシューバーが与えられた。襟は立てると耳までかぶり、内側は毛足が長く暖かいので助かるが難は少し重いので閉口した。

作業は自動車工場の建設で板材運搬等の雑役作業である。時々厳寒時の作業要員で作業に出るが皮膚も弱っているのか退院者の大半は凍傷になり治療に行くとソ連軍医は凍傷にかかる方が悪い、凍傷になった者はチョロマン（営倉）と言われて驚かされた。自分では凍傷にかかっても分からないうちにお互いに注意しながら気をつける事にした。工場内のモーター等機器類のほとんどが日本製で満州から持ち帰ったものと思われた。

作業に出る朝はガラガラと歩いて行くも厳寒時零下四〇度になると全員作業中止（特技者を除く）、命令が出るとラーゲル目指して帰る早さ脱兎のごとくである。

十二月二十一日と記憶するが、後から入所した私たちを除く全員に往復ハガキが渡され内地との通信が出来るようになった。皆嬉しそうに、しかし半ば疑いの眼でハガキを書いていた。私たちは員数外でもらえず残念である。

二十三日の夜、突然第七中隊に転出命令が出た。帰国の話が出て皆飛び上って喜んだ。ソ連側の人数が第七中隊の人数と合い、幸運であった。

二十四日の朝早くから検査があり、いろいろな物が押収されても誰も気にしなくなった。

身体検査もあり体調不良な者は残された。

将校に聞くと東京ダモイと答えた。今まで何度も騙されてばかりの言葉である。その夜、第三ラーゲルに向って出発。二日間第三ラーゲルにいた、その間に被服類と給与を渡されて食事もまた変わっていて、各人食券にて食堂で食べるのである。

二十六日イルクーツクの駅まで行き貨車に乗る。装具は軽かったが私達は先発隊である。ところが貨車は西へ走り二時間後にマルタに到着、町もな

く荒涼とした野原で軍の演習場の跡のようである。また騙されたとがっかり、帰る希望もなくなり皆呆然と立ちすくんだ。

後発組のため、炊事場作りをするのだが器用な人が多く、竈を作って大きな釜を据えて出来上がり風呂に入る事になり、雪を溶かして沸かしてみると枯草多く、ぬるくて失敗。

釘がないので釘抜きを作ってもらい二人一組で釘探しに出掛ける。山の中腹に古い兵舎の跡があり、その中で釘を集めて回った。

三月二十五日出発、命令が出て貨車でナホトカに向って出発。長い事かかってナホトカに着く。幕舎生活、共産思想の教育、集会禁止、赤旗の歌等いろんな規則が設けられ、違反した者は部隊全員逆戻りとの事。また逆戻りした部隊もあると聞く。とにかく阿呆になって話を聞き、一日も早く帰国出来る事を祈った。

ナホトカの港に明優丸が迎えに来てくれて乗船するもなお不安でいっぱいである。船が岸壁を離

れた途端、皆一斉に愛国行進曲を唄って萬歳三唱し、万感胸に迫って涙した。

昭和二十二年四月三十日舞鶴入港。五月二日上陸、日本の土を踏みやると帰って来た実感安堵の気持ちでいっぱいになる。宿舎で米軍によるDDTを頭からかけられ、被服は海軍の水兵服を着て家に帰る事になった。中庭に果物等販売していたが金銭感覚が合わず誰も買う者はなかった。

家に帰って一カ月近くはお粥に近いものを食べて胃腸を調整して、一年近く身体を休める事にして二十三年四月に就職。身体の不調はありました。昭和二十三年結婚、一男一女に恵まれました。今思いますとよく無事に生きて帰れた喜びを噛みしめながら、六十年前を振り返っております。

#### 【執筆者の紹介】

生年月日 昭和二年二月一日生

本籍 滋賀県彦根市古沢町

現住所 滋賀県彦根市河原

学歴 昭和十四年三月 青波尋常高等小学校卒

昭和十四年四月 県立彦根商業学校入学

昭和十八年十二月 同校 卒業

職歴 昭和十九年一月 満州国鞍山市 株式会

社 昭和製鋼所入社

昭和十九年一月 茨城県友部訓練所入所

昭和十九年三月 二カ月の訓練終了渡満

昭和十九年四月 本社経理課財産班勤務

昭和十九年 昭和製鋼所、他二社と合併

満州製鉄株式会社 理事長 岸本綾夫

陸軍大將就任

父 庄大 関西電力の前身宇治川電気田町変電所

勤務 兼業農家

母 みな 農業

兄弟 四人(現在)

(滋賀県 林 憲一)

## シベリア抑留記

島根県 谷口澄晴

入隊までの職歴

嘉久志小学校卒業

兵庫県出石国民学校本科四年卒業

同 右 研究科二年卒業

父は出石町にて瓦製造業に従事しており、跡を継ぐために出石町に行く

昭和十四(一九三九)年十二月一日徴兵検査、

十二月生まれは翌年まわし、司令官より甲種合格と言われ喜んで森脇村長に報告すると、村長は立つて司令官の所に行かれ、私は控室に入り、直ちに呼び出され検査。軍曹の所より軍医の所に行き、大丈夫と言われ、司令官の前に行き、第二補充兵に編入と申され残念でした。

私が小学校五年生のとき、体操の鉄棒で左手を折り、村長の息子さん、小学校の教頭先生が私を